

善へ行て、極上の茶を煎じさせて、香の物にて茶漬こそよからんとて、一兩輩打連て八百善へ行て、茶漬飯を出すべしと望しに、暫く御待有べしと、半日ばかりもまたせて、やうやくにかくやの香のものと、煎茶の土瓶を持出たり、かの香の物は春の頃よりいと珍らしき瓜茄子の粕漬を切交せにしたる也、扱食おはりて價をきくに、金一兩貳分なりと云、客人興さめて、いかに珍らしき香の物なればとて、あまりに高直也といへば、亭主答て、香の物の代はともかくも、茶の代こそ高直なり、茶は極上の茶にても、一ト土瓶へ半斤は入らず、茶に合たる水の近邊になき故、玉川迄水を汲に人を走らしたり、御客を待せ奉りて、早飛脚にて水を取寄せ、此運賃莫大也と被申ける。

江戸料理通大全 初編 東都之大閻閣欄燈、古稱八百、今餘二千、凡飲食之鬻於市者、五步一樓、十步一閣、魚標酒旆、絡繹相望、日本堤北、有八百善者、稱都下第一、公侯大人、命割烹競奇饌、美景良辰期賞心約樂事○中略

壬午○文政五年
春日

蜀山人

江戸名物詩初編 百川樓參會 日本橋浮世小路

諸家振舞名弘宴、貸切更無一日休、浮世小路浮世客百千來、會百川樓、

萬八書畫會淺草平右衛門町

萬八樓上書畫會、不拘晴雨御來臨、先生席上皆揮毫帳面頗付收納金、

田川屋料理金杉大恩寺前

風爐場淨在於庭、醉後浴來酒乍醒、會席薄茶料理好、駐春亭是駐人亭、

平清會席深川

會席風流辰已誇、坐鋪近對水之涯、尾花梅本山本客馴染連來此地奢、

大七沈鯉向島